

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.139 July, 2018

目次

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉

公開シンポジウム「ポスト冷戦と平成デモクラシーの日本政治」を開催いたします(10/6).....1

〈CAPS主催企画の報告〉

ドキュメンタリー連続上映会
—沖縄の戦後に向き合うシリーズ—

第1回「米軍(アメリカ)が最も恐れた男 その名は、カメジロー」

CAPSポスト・ドクター 池宮城 陽子2

第2回「17才の別れ」

CAPS主任研究員 恵羅 さとみ3

〈シリーズ 本を読む〉

深澤 直人著『デザインの輪郭』

経済学部教授 宮脇 俊文4

〈2018年度 新規プロジェクトの紹介 第2回〉

パイロット研究「ミトコンドリアDNA解析を基軸にしたヤマビルの進化的研究」

理工学部助教 井内 勝哉5

〈2018年度 CAPSメンバー紹介〉.....6

〈CAPS研究員 研究内容紹介〉

沖縄基地問題の歴史的展開を探る

CAPSポスト・ドクター 池宮城 陽子8

〈CAPS叢書の刊行〉

李 林静・山越 康裕・児倉 徳和 編著

『中国北方危機言語のドキュメンテーション』

ヘジェン語/シベ語/ソロン語/ダグール語/

シネヘン・ブリヤート語』.....9

〈2018年度 新着図書 ～外交関連・和書～〉.....9

〈CAPS活動報告〉.....10

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

開催予告

成蹊大学アジア太平洋研究センター 主催

公開シンポジウム「ポスト冷戦と平成デモクラシーの日本政治」を開催いたします

日時：2018年10月6日(土) 14:00～ 会場：成蹊大学6号館501教室

成蹊大学アジア太平洋研究センター主催
2018年度公開シンポジウム

ポスト冷戦と 平成デモクラシーの 日本政治

司会
高安 健将
成蹊大学法学部教授
アジア太平洋研究センター所長
著書『国際関係論—戦後から現代まで』

登壇者
清水 真人
日本経済新聞編集委員
著書『平成デモクラシー史』

宮城 大蔵
上智大学総合グローバル学部教授
著書『現代日本外交史—冷戦後の展開—』

2018年10月6日(土)
時間 14:00～(開場 13:00)
会場 成蹊大学6号館501教室
入場無料・申し込み不要/定員 300名

アジア太平洋研究センター TEL: 0422-37-3549
東京都成蹊野市吉祥寺北町3-3-1 www.seikei.ac.jp/university/caps
(吉祥寺駅下車、北口バスの別荘)・2番目の5分「成蹊学園前」下車

1990年代以降、日本の政治社会は、内外の大きな変化の波にさらされてきました。冷戦後、国際環境は激変し、政治が判断を迫られる時代となり、国内政治では、政治改革が劇薬となって政党システムは今日に至るまで不安定なままとなっています。

このシンポジウムでは、登壇者として清水真人氏(日本経済新聞編集委員、『平成デモクラシー史』著者)ならびに宮城大蔵氏(上智大学教授、『現代日本外交史』著者)をお迎えし、平成の終わりに、四半世紀を振り返り、今後の日本政治の行方を考えたいと思います。

今日まで続く日本政治の政党間競争と政策決定を学びたい方、この30年間の政治をもたらしした構造的要因をあらためて捉え直したい方、冷戦後の日本外交に関心がある方、多くの研究者、学生、市民の皆様の積極的な参加を、心からお待ちしています。

※詳細はHPをご覧ください。

(<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>)

CAPS 主催企画の報告

ドキュメンタリー連続上映会 ―沖縄の戦後に向き合うシリーズ―
アメリカ
第1回 「米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー」(2017年、佐古忠彦監督)
 CAPS ポスト・ドクター 池宮城 陽子

2018年5月26日、連続上映会（沖縄の戦後に向き合うシリーズ）の第1回として、佐古忠彦監督『アメリカ米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー』が上映された。沖縄出身である筆者は、瀬長亀次郎の名前は以前から知っていたが、どのような人物か詳しくは知らなかった。そこで、本映画上映後の解説を担当するにあたり、佐古監督の著作『「米軍が恐れた不屈の男」瀬長亀次郎の生涯』（講談社、2018年）を読み、沖縄県那覇市にある瀬長亀次郎の記念館「不屈館」を訪れた。本報告では、それらの経験を通して学んだことも交えながら、上映会の様子を記していきたい。

本映画は、沖縄基地問題をめぐる昨今の状況に対する佐古監督の強い問題意識の下で製作されたものである。佐古監督によれば、沖縄基地問題をめぐり存在する沖縄と本土との間の温度差や溝は、沖縄の歴史が広く知られていないことに起因しているという。そこで、戦後沖縄の重要人物である瀬長亀次郎（以下、亀次郎）を通じ、沖縄の過去を広く知ってもらおうと考え、ドキュメンタリー番組を製作し、これを映画へと発展させたのだという。

映画全体を通して強調されていたのは、亀次郎が沖縄県民のために人生を捧げた政治家であったこと、そしてその歩みが常に民衆とともにあったことである。米国による数々の理不尽な統治政策に対して、亀次郎は徹底的に抗った。そのため、政治家としての活動を開始してから間もなく、不当ともいえる理由に基づき逮捕、刑務所に収監された。那覇市長に就任すると、米国による市政への度重なる妨害行為が行われ、亀次郎は1年も経たずに市長の座から引きずり降ろされた。しかしながら、民衆は常に亀次郎の味方だった。刑務所を出所した際には、大勢の人々が刑務所周辺の沿道を埋め尽くし、喜びを分かち合った。亀次郎が那覇市長になってからは、市民は納税率を上げることで市政を支え、多くの人が手紙を通して亀次郎を励まし続けた。亀次郎と沖縄の民衆は互いに

支え合い、団結することで、米国統治下を生き抜いたのである。沖縄の日本本土復帰は、そのような亀次郎と民衆の強い団結力がなければ、実現しえなかった。そこに、何万人と集結して、何かを訴えるという沖縄県民の行動の原点を、見出すことができるのである。

上映後には、映画、佐古監督の著作、そして「不屈館」訪問を通じて知った亀次郎の人物像を三つの視点から解説した。一つ目は、亀次郎が日本人としての信念を強く持っていたということである。沖縄の本土復帰を目指すことは、亀次郎にとって、日本人として自然なことだったのではないかとのコメントを、「不屈館」の館長でもある亀次郎の次女・内村千尋氏から頂いた。実際、亀次郎が記した日記には、「日本国民の魂をもって」「日本民族の誇りをもって」といった表現がでてくる。亀次郎のあらゆる行動の根底にあったのは、日本人としての強い信念だったのである。この点については、来場者からも、非常に意外で驚いたとの感想を頂戴した。

二つ目は、情報発信力の高さである。亀次郎は数多くの演説会を開催するなどの政治活動の傍らで、積極的な執筆活動を行っていた。これは、政治家になる前の亀次郎が、ジャーナリストとしての経験を積んでいたことも影響していると考えられる。次女・内村千尋氏も、亀次郎は「伝えることの大切さを意識していたのではないか」とコメントされた。そして、亀次郎による情報発信の対象は、沖縄のみならず、本土の人々にも及んだ。亀次郎は、本や雑誌記事を通して沖縄の現状を本土の人々に訴え、沖縄の本土復帰を目指したのである。



池宮城 陽子（筆者、解説者）

三つ目は、民衆の団結を重視したことである。これは前述した映画のポイントそのものだが、見逃してはならないのは、亀次郎が考えていた民衆の団結とは、沖縄に加え本土の人々も含めた日本国民の団結だったことである。このような考えに基づいた亀次郎の働きもあり、沖縄返還問題は沖縄の問題としてではなく、日本全体の問題として取り組まれるようになったのである。

このような視点から亀次郎の人物像を捉えてみると、沖縄基地問題を考えるにあたって、今後の課題が見えてくるように思えた。佐古監督が指摘

しているように、沖縄基地問題は日本全体の問題であるという認識が希薄なのが現状である。どうすれば、沖縄の歴史、つまり沖縄基地問題の歴史的経緯を日本全国の方々に広く知ってもらえるのか。有意義な議論を盛り上げるには、情報発信にどのような工夫が必要か。来場者からは、上映会をきっかけに一層沖縄に関心を持ち、基地問題について考えていきたいとのコメントを多数頂戴した。筆者自身にとっても、多くの気づきや学びを得られた上映会となった。

ドキュメンタリー連続上映会 ―沖縄の戦後に向き合うシリーズ―

第2回 「17才の別れ」(2014年、齊木貴郎監督)

CAPS 主任研究員 恵羅 さとみ

2018年5月31日、連続上映会（沖縄の戦後に向き合うシリーズ）の第2回として、齊木貴郎監督『17才の別れ』が上映された。上映後は、トークゲストとして齊木貴郎監督をお招きして、参加者と活発な交流が行われた。

この作品は、沖縄戦で「瑞泉学徒隊」の一人として動員された宮城已知子^{みちこ}さんの語りを記録したものだ。戦前、沖縄には21校の中等学校があり、沖縄戦ではこれらすべての中等学校の生徒たちが戦場に動員された。宮城已知子^{みちこ}さんが通っていた県立首里高等女学校では生徒61名が徴兵され33名が戦死している。

負傷兵や積み上がる遺体を前にして「人間が人間でなくなる」「かわいそうとも思わない」ようになる極限状態、艦砲射撃が降り注ぐ中、芋を掘りに行き水を汲みに行った鮮やかな記憶、学徒隊という弱者を都合よく利用する兵士に対する信頼の失墜と怒り、忘れられない「(目の前でなくなった友人の) 節ちゃん」、はじめて神に祈ったとき艦砲射撃が米軍の食事時間にあたりピタッととまって九死に一生を得たこと。宮城さんの真っ直ぐで淡々とした語りが印象的だ。突如として最前線におかれた生と死、そこに、彼女たちが這うように生き延びた道や畑などで撮影された現在の沖縄の自然や風景、アメリカ合衆国メリーランド州の公文書館が保管する沖縄戦線アーカイブスの映像、そして現代の沖縄の女子高生の姿などが重ねられていく。かつてひとりの女学生が経験した不合理で凄惨な戦場体験に引き込まれるように、食い入るよ

うにして全編をみた。過去/現在/未来とつづくのちのありよう、それに対峙する戦時下での非人間的ありようを教えられた。

この作品の上映企画を持ち込んでくださった齊木貴



トークゲスト：齊木貴郎氏（監督）

郎監督とも初めてお会いすることが出来た。齊木氏は横浜市出身で、アメリカを拠点に多くのテレビコマーシャルをプロデュースしてきた経歴を持つ。日々、自分の感性に触れることを意識し、すべてのことをストップしてでも没頭できることを模索しているという。2011年6月23日の沖縄慰霊の日に、たまたま宮城さんについての新聞記事を読み、体験者が話す機会がなくなっていくことを知って危機感を抱いたことをきっかけに、この映画を製作した。意図的な編集を抑え、また若い人を意識してつくるのではなく、自分が感じたままに作った結果であるという。沖縄、日本、アメリカ、現在の紛争地域、そしてこの地球について、時間軸を超えて想いを馳せてほしいと思いを語られた。参加者からは、この貴重な作品をもっと若い人に観てもらいたいという声が多く出された。今後も、幅広い層に訴えるような上映会を企画し、情報発信していく責務をあらためて感じた。この度のお会いに感謝したい。

シリーズ 本を読む

深澤 直人 著『デザインの輪郭』(TOTO出版、2005年)

経済学部教授 宮脇 俊文

著者の深澤直人は工業デザイナーである。無印良品のプロダクト・デザインなどを手がけている人物だ。文学を専門とする評者が本書に巡り会うきっかけとなったのは、汐留ミュージアムでの「AMBIENT 深澤直人がデザインする生活の周囲展」と題する彼の展覧会だった。ちょうど「日常とは何か」ということにこだわり続けていたとき、ふと駅に貼られたポスターでこの個展のことを知った。それは自分の分野とは直接関係のないものではあったが、そこにある「ふつう」という概念に惹かれて汐留まで出かけていった。

そこで展開されている作品(プロダクト)は、特別人の目を引くような奇抜なものはまったくなく、ただごく普通の日常に溶け込んでいるものだけだった。しかし、それらはごく普通でいながら、とても印象的なものであった。普通なものに見るものの気を引く理由はどこにあるのだろうか?そんなことを考えながら立ち寄ったミュージアム・ショップで本書に出会った。

本屋には暇があればよく立ち寄るが、それでもこの個展に足を運ばなければ、おそらくこの本に出会うことはなかっただろう。そもそも基本的に評者の興味のカテゴリーからは外れているからだ。そう思うと一枚のポスターの意義は実に大きい。グレーを基調としたシンプルな装丁の『デザインの輪郭』。そこにはデザインという枠を越えた人生の哲学がある。我々の生き方の根源が描かれている。

「何の変哲もない風景の中にも…輪郭がある」と著者はいう。「ものがあって、人が動いた跡があるとか。見えないけど、たぶん僕らにはシェアしている何かがある」。つまり、著者が言いたいのは、「視覚化できないところに何かがある」ということだ。見えないものの中に存在する何かの力に著者は惹かれるのだ。

それは言い換えれば、ごくありふれた日常の中

に何か特別なものを見いだすということである。つまり、ごく「ふつう」の状態の中にある見えないものを見いだすという作業だ。深澤によれば、「ふつう」という言葉は意外とネガティブな意味合いで使われることが多く、誰もがふつうであることを嫌うのだ。しかし、我々実際「それに助けられている」ことに気づいていない。特にデザインの分野においては、ふつうであることはいいことなのだという自覚を持つことは難しいようだ。

たしかに、ふつうであるということは個性がないという意味であることが多い。しかし、「いいふつうがつくれたら本当にすごい」と深澤はいう。「ふつうのことを、『いいふつう』にするってことが生活レベルが上がるってことなんだけど、変えてしまおうと思っているから間違いなんだ」と。まさにその通りかもしれない。我々はすぐにふつうであることを否定し、それを変えようとする。そこからいいふつうをつくり出そうという発想はしない。深澤の次の見解はまさに的を射ている。



人はものを買うときの期待値としては、ふつうを求めないんです、わざわざお金を払うからです。でも生活に戻ったときに急にふつうを期待するわけですよ。結果的に生活の中に個性的で、突出したものがあふれるんです。

このことに納得する人は多いのではないだろうか。我々はつい「付加価値」を求めてしまうが、「付加しないことが価値」であるという発想がなかなかできない。つまり、いま目の前にあるふつうをさらにいいふつうにしようとはしないのだ。確かに深澤のデザインしたプロダクトに突出したものはなく、すべて空間になじんでいる。つまり、空間のなかのひとつの輪郭を実にうまく捉えているのだ。

たとえば海外旅行に出かけて、ガイドブックに

紹介されている場所を片っ端から回るのではなく、その土地の「日常のあたりまえの感性に触れる」ことこそが「幸せの本質」ではないだろうか。深澤はこうした感性を今の日本人はなくしてしまっていると指摘する。我々はいつしか何気ないひとつの空間に溶け込むことができなくなってしまったようだ。「ふつうのよさの感触」を忘れてしまったと

いうことは、つまり、日常を生きる自分の物語を見失ってしまったということに他ならないのだ。物語は隠れている。感動的な物語はすぐそこにあるのだ。

「大切なものは、いつもあたりまえのところにある」——このことを本書はデザインを通して我々に教えてくれる。

2018年度 新規プロジェクトの紹介 第2回

パイロット研究

「ミトコンドリアDNA解析を基軸にしたヤマビルの進化的研究」

理工学部助教 井内 勝哉

<背景>

ヤマビル (*Haemadipsa*) (図1) は、日本において北は秋田から南は沖縄までの湿潤な森林に生息する陸生吸血ビルである。日本のみならず、台湾、ベトナム、タイ、マレーシアなどのアジアの亜熱帯地域にも生息し、吸血する動物に依存する形で特異的に進化を遂げてきた。鹿・サルなどの大型獣や鳥類に寄生することで生息域を拡大してきたと考えられているが、その生息域の拡大ルートについて科学的に証明されていない。近年の地球温暖化の影響もあり、その生息分布域は拡大傾向にある。



図1, 日本ヤマビル

細胞内小器官のひとつであるミトコンドリアは、生体のエネルギー通貨であるアデノシン三リン酸 (ATP) の大部分の生産を担う

器官である。ミトコンドリアは、独自の環状DNAを持っており、多くの動物では、母方のミトコンドリアDNAが遺伝する (母性遺伝)。ミトコンドリアDNAは、核に存在するゲノムDNAと比較して、変異速度が速く、進化過程に重要な役割を果たしてきた。したがって、人類学の分野において、ヒトミトコンドリアDNAの塩基配列を解析し、塩基置換速度が速いDループなどの配列の違いをもとにして進化系統樹作成が行われてきた。こうした

進化系統樹作成をもとに、人類の起源を明らかにする方法が一般的である。ヒトのみならず、他の動植物の進化過程を研究するうえで、ミトコンドリアDNAの塩基配列を解析し、進化系統樹を作成することは重要である。

<目的>

本研究では、日本およびアジア各地に生息するヤマビルのミトコンドリアDNA配列を解析し、進化系統樹を作成し、ヤマビルの進化過程を明らかにすることを目的とする。

<方法>

本研究では、成蹊中学・高等学校教諭 佐藤尚衛先生の協力のもと、各地域に生息するヤマビルを採種し、実験に使用する。ヤマビルの進化の過程を解析するため、アジア地域に生息するヤマビルからDNAを抽出し、ミトコンドリアDNAの全塩基配列をシーケンスにより解析する。解析したミトコンドリアDNA配列に関して、生育地域別に比較し、専用ソフトウェアを使用して分子系統樹を作成する。

<学際的意義>

全く解析が行われていないヤマビルのミトコンドリアDNAの全長を解析することで、ミミズやゴカイなどの他の環形動物門の既知ミトコンドリアDNAの塩基数や配列を比較できる。これまでの形態学的手法による分類を、分子遺伝学的手法により正確に証明できる。ヤマビルの進化の過程を明らかにできれば、生物進化論的な観点で大変興味深い。

本研究では、ヤマビルのミトコンドリアDNA

の全配列を解析する。これにより、これまで環
形動物門の分子系統樹の作成に使用されてきた
cytochrome c oxidase subunit I (CO I) の配列に
加えて、他の候補配列を見つけることも可能であ
る。ヤマビルの生育地域によって、ミトコンドリ

アDNA配列に差異を確認できれば、ヤマビルの
歴史的な系統学的な意義を見出すことができる。
大陸の地殻変動に着目すれば、ヤマビルの生息域
の変遷と気候・地殻変動の関係性についても考察
でき、地学的な観点でも大変興味深い研究である。

2018年度 CAPSメンバー紹介

今年度のCAPSは、高安健将新所長をはじめ2名の新所員、新課長、1名のポスト・ドクターが新たなメンバーに加わりました。ニューズレター前号に新所長挨拶を掲載いたしました。あらたに新メンバーの方々に自己紹介を頂きましたので次ページで紹介いたします。今年で38年目を迎えたセンターは、この新体制の下で更なる発展を目指してまいります。

2018年度 アジア太平洋研究センター(CAPS)構成メンバー

所長・運営委員会委員長 高安 健将

運営委員(任期2年)

経済学部 川越 俊彦(継続)

理工学部 鳥毛 明(新任)

文 学 部 庄司 宏子(新任)

法 学 部 西村 美香(継続)

所員(任期1年)

経済学部 宮脇 俊文(新任)

理工学部 齋藤 洋司(再任)

文 学 部 ラルフ J.バーナビー(新任)

法 学 部 井上 正也(再任)

研究員

主任研究員 惠羅 さとみ(2年目)

ポスト・ドクター 池宮城 陽子(1年目)

事務室

課長 寺西 浩

主査 斉藤 美幸

主査 長橋 典子

山中 佐智子



上写真: 第2回所員会議にて撮影。

前列左から井上所員、齋藤所員、高安所長、宮脇所員、ラルフ所員

後列左から長橋、山中、斉藤、寺西課長、惠羅研究員、池宮城研究員

【経済学部 宮脇 俊文 新所員】

成蹊に来て今年で30年目になりますが、今年度で定年を迎えます。僕の成蹊の歴史はまさに平成とぴたりと重なります。専門はアメリカ文学ですが、村上春樹の文学やジャズ、ポピュラー音楽のゼミや講義なども担当してきました。英語系科目は言うまでもありません。こうした経験を活かし、当センターの所員として最後にならんかのかたちで貢献できればと願っています。

【文学部 ラルフ J. バーナビー 新所員】

I am Dr. Barnaby Ralph, currently an Associate Professor in the Department of British and American Literature, Seikei University. I've published and presented worldwide on many topics, from literature to interdisciplinary studies. Some of my recent publications include the book *London And Literature, 1603-1901* (CSP), where I was principal editor, and "Four Men in a Boat: Dryden, D'Avenant, Shadwell, Locke and The Tempest" (*Poetica* 84). I have also had an international career as a classical musician, recording for radio, television and CD.

【池宮城 陽子 新ポスト・ドクター】

11歳までを沖縄で過ごしました。日本政治外交史・日米関係史を専門に、日米の外交文書を用いて沖縄基地問題を歴史的に研究しています。沖縄が日米の間で問題となり始めた時から順に展開を追ってみたいとの思いから、博士論文では第二次世界大戦の終戦前後から1950年代初頭までの時期を扱いました。現在は、そこから1960年までの沖縄をめぐる日本の構想や対応を考察しています。微力ではありますが、センターの発展に貢献できるよう努めてまいります。

【研究助成課 寺西 浩 新課長】

4月より図書館事務室から研究助成課へ異動し、アジア太平洋研究センターの事務を所管することになりました。研究プロジェクトを円滑に進めるための支援、また各種のイベントやシンポジウムを通して、研究活動や研究成果を学内外へ情報発信するための支援等、長い歴史と実績のあるアジア太平洋研究センターの今後の一層の発展のために、微力ではございますが、尽力いたす所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

「招聘外国人研究員」制度

CAPSの重要な使命のひとつに「国際学術交流の促進」があります。本学での研究を望む海外の研究者を招く制度として、今年度は、以下の方々を「招聘外国人研究員」として受け入れます。

名前(役職)	所属(国名)	研究テーマ	滞在期間	受入者
Dougal Mcneill ドゥーガル・マックニール (上級講師)	ヴィクトリア大学 (ニュージーランド)	Tokyo as an imagined space in modern Anglophone literature.	2018/11/19 ～ 12/21 (33日)	遠藤 不比人 (文学部)
Brendon Cannon ブレンドン・キャノン (助教授)	ハリファ大学 (アラブ首長国連合)	Defining Policy Options for Japan's Indo-Pacific Strategy.	2018/6/10 ～ 2018/7/10 (31日)	墓田 桂 (文学部)
Bjoern Dressel ビョルン・ドレッシェル (准教授)	オーストラリア 国立大学 (オーストラリア)	An Empirical Study of Judiciaries in Southeast Asia.	2018/6/11 ～ 6/23 (13日)	井上 智夫 (経済学部)
Neil Martin ニール・マーティン (Director)	International Development, Behavior Analyst Certification Board (イギリス)	Development and reinforcement of participation and social engagement of Japanese students.	2019/2/1 ～ 3/1 (29日)	Maurice Jamall (文学部)

CAPS 研究員 研究内容紹介

沖縄基地問題の歴史的展開を探る

CAPS ポスト・ドクター 池宮城 陽子

私の研究テーマは、第二次世界大戦後初期の沖縄をめぐる日米関係です。当時の外交文書を多用しながら考察し、沖縄基地問題の原点を明らかにすることを目的としています。

沖縄で生まれ、小学5年生までを過ごした私にとって、米軍基地は身近な存在でした。しかし、千葉に引っ越してから、成長するに従い行動範囲が広がっても、普段の生活の中で米軍基地に出くわすことは殆どありませんでした。なぜ本土には米軍基地があまりないのだろう。なぜ、沖縄米軍基地の削減は中々進まないのだろう。このような問題意識のもと、沖縄が日米両政府間で問題となり始めた第二次世界大戦終結直後から順にその展開を追っています。

これまでの研究の過程では、1951年のサンフランシスコ講和と日米安全保障条約（以下、旧安保条約）の締結時において、日米両政府の間には、現状とは異なる未来予想図が存在していたことが明らかになりました。日本が米国に基地を提供し、米国が日本に安全を提供するという、現在まで続く日米の安全保障協力関係は、旧安保条約を締結した段階ではあくまでも暫定的なものとみなされていました。それは、日本の提供する基地の多くが沖縄に長期にわたり存在する現状が、旧安保条約の締結時には想定されていなかったことを意味します。つまり、沖縄に大規模な米軍基地を長期にわたり存続させることを、日米両政府が当初から想定していたわけではなかったのです。

当時の日米両政府は、いずれ日本が憲法9条を改正し、防衛のための支援を互いにし合う相互防衛条約を締結するという将来構想を抱いていまし

た。つまり、日本が米国と相互防衛条約を締結し得るほどの軍事力を備え、そして沖縄を含む領土の防衛責任を負担できるようになれば、論理的にはその分だけ沖縄における米軍基地の必要性は失

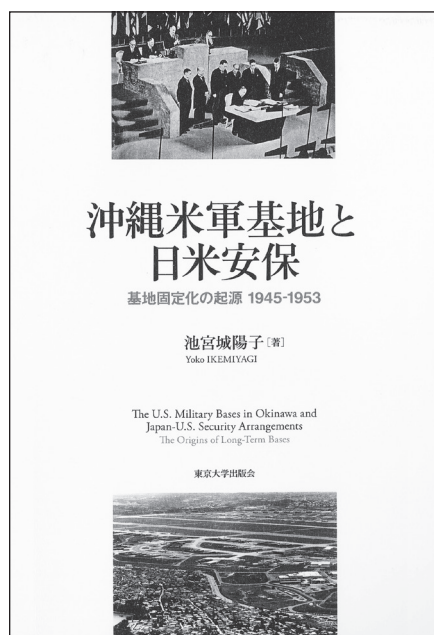
われ、基地を整理・縮小することが可能になります。1951年以降、暫定的に築かれた安全保障協力関係が変更され、予定通り相互防衛条約を締結できる状況が生まれていれば、沖縄米軍基地の状況も今とは異なるものになっていたと考えられます。

もちろん、実際に沖縄米軍基地の整理・縮小を行おうとすれば、沖縄を「血で買った」と理解する米軍部の強い抵抗が起きたでしょう。また、旧安保条約に基づき、日米が安全保障協力の関係を築き始めたことを踏まえれば、沖縄から米軍基地が完全になくなる

可能性は低かったと思います。ですが、旧安保条約締結後の数年間、米国政府は日本の防衛力増強を強く望み、日本が沖縄防衛に関与することを沖縄施政権返還の条件としていました。日本による沖縄防衛の責任負担の実現を、米国政府は現実的に希望していたのです。

しかし実際は、そうはなりません。周知の通り、その後憲法9条は改正されず、1960年の安保改定の結果、日本が米国に基地を提供し、米国が日本に安全を提供するという日米の安全保障協力関係は維持されることになりました。つまり、その後の展開として、1951年当時の想定とは違った安全保障協力関係が築かれることになったのです。

なぜ、日米両政府は当初暫定的と考えていた安全保障協力関係を継続することにしたのか。そのことが、今日に至る沖縄米軍基地の存続状況にど



のような影響を及ぼしているのか。これらの問いへの答えを探るべく、現在は、1960年の安保改定と沖縄米軍基地の存続との関連性について研究しています。従来の研究では看過されがちであった

このような視点に基づく作業を通して、沖縄に大規模な米軍基地が長期にわたり存在し続けていることの要因を明らかにしていきたいと考えています。

CAPS 叢書の刊行

『中国北方危機言語のドキュメンテーション ヘジュン語/シベ語/ソロン語/ダグル語/シネヘン・ブリヤート語』 (三元社、2018年4月)

李 林静・山越 康裕・児倉 徳和 編著

本書は、CAPS共同研究プロジェクト「近代中国の危機言語と言語政策」(研究期間：2013.4.1～2016.3.31 プロジェクト責任者 李林静 法学部教授)の研究成果の一部として刊行されたものです。それぞれの言語を専門に調査する言語研究者が現地へ赴き、話者の話す自然な発話を採録し、それを文字化し、分析を加えたものです。

現在世界に存在する6000～7000の言語の大半は、次世代・次々世代への母語の継承が困難な危機言語であるといわれています。

本書のようなテキスト集は、単なる「用例」の羅列ではなく、当該民族の文化を知る上でも貴重な資料となります。

なかでもヘジュン語は母語話者が5人以下となっており、こうした言語調査の場を除くと、すでに日常生活では用いられなくなっています。このような状況で、本書はヘジュン語の母語話者同士が日常的话题について会話する場面を収録した貴重な記録となっています。
(本書まえがきより抜粋)



2018年度 新着図書 ～外交関連・和書～

※学生・教職員とも資料の閲覧や貸出しが可能です(学生証・教職員証が必要)。成蹊大学図書館OPACから文献検索が出来ます。

	書籍名	編著者	刊行年／出版社
通史	日米関係史	五百旗頭 真	2008／有斐閣
	日中関係史	国分 良成 他	2013／有斐閣
	戦後日本のアジア外交	宮城 大蔵	2015／ミネルヴァ書房
	戦後日韓関係史	李 鍾元 他	2017／有斐閣
	増補 海洋国家日本の戦後史 アジア変貌の軌跡を読み解く	宮城 大蔵	2017／筑摩書房
	日本の外交 「戦後」を読みとく	添谷 芳秀	2017／筑摩書房
回顧録	聞き書 緒方貞子回顧録	野林 健 他編	2015／岩波書店
	激動のアジア外交とともに 外交官の証言	池田 維	2016／中央公論新社
	僕は沖縄を取り戻したい 異色の外交官・千葉一夫	宮川 徹志	2017／岩波書店
	カンボジアPKO日記 1991年12月～1993年9月	明石 康	2017／岩波書店
研究書	池田政権期の日本外交と冷戦 戦後日本外交の座標軸	吉次 公介	2009／岩波書店
	自衛隊海外派遣と日本外交 冷戦後における人的貢献の模索	庄司 貴由	2015／日本経済評論社

CAPS 活動報告 (2018.3.16 ~ 2018.6.15)

1. 公開講演会、研究会等

～ドキュメンタリー連続上映会～

「沖縄の戦後に向き合うシリーズ」

<第1回>

開催日	5月26日(土)
タイトル	米軍(アメリカ)が最も恐れた男 その名は、カメジロー
解説	池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)
参加者	333名

<第2回>

開催日	5月31日(木)
タイトル	17才の別れ
ゲスト	齊木 貴郎(監督)
参加者	129名

2. 研究出張

～海外出張～

期間	3月22日(木)～3月29日(木)
プロジェクト名	グローバル・ジャスティスの模索とローカルティ
出張者	細谷 広美(文学部教授)
行先	アメリカ合衆国、カナダ
目的	資料収集

期間	3月25日(日)～3月31日(土)
プロジェクト名	グローバル・ジャスティスの模索とローカルティ
出張者	佐藤 義明(法学部教授)
行先	イギリス
目的	調査・資料収集

期間	3月26日(月)～3月29日(木)
出張者	惠羅 さとみ(CAPS主任研究員)
行先	ベトナム
目的	調査・資料収集

期間	4月9日(月)～4月13日(金)
プロジェクト名	グローバルエイジングとライフコース変容
出張者	渡邊 大輔(文学部准教授)
行先	ドイツ・ベルリン
目的	学会参加

～国内出張～

期間	3月18日(日)
プロジェクト名	認知言語学の新領域開拓研究
出張者	森 雄一(文学部教授)
行先	大阪府
目的	日本語用論学会メタファー研究会出席

期間	3月26日(月)
出張者	池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)、長橋 典子(CAPS)、山中 佐智子(CAPS)
行先	埼玉県
目的	ドキュメンタリー連続上映会での上映作品視聴

期間	5月9日(水)～5月11日(金)
出張者	池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)
行先	沖縄県
目的	ドキュメンタリー上映会解説のための資料収集

3. 会議の記録

開催日	4月24日(火)・5月29日(火)
会議名	所員会議

開催日	5月1日(火)・5月31日(木)
会議名	運営委員会

CAPS Newsletter No.139

2018年7月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>